

# 1歳6ヶ月児の母親の子ども虐待傾向

—— 健診時における質問紙調査を通して ——

山下一夫\*, 高芝朋子\*\*

(キーワード: 子ども虐待傾向, 育児サポート, 母親役割意識)

## I 問題

### 1. 子ども虐待の分類と定義

子ども虐待は子どもの人権を著しく侵害し、その生命をも脅かす深刻な問題である。虐待ととらえられる行動を、母親は実際にどの程度とっているのだろうか。育児不安やバーンアウトの調査研究は見られるものの、管見ではあるが、虐待の行動そのものを中心に据えた調査研究は見つけることができなかった。

そもそも、子ども虐待は、どこまでが虐待か線を引くことは非常に困難である。「子ども」という言葉自体、児童福祉法第4条では「満18歳に満たない者」と規定されているものの、実際には必ずしも年齢で区切れるものではない。また、虐待の行為は「親または親にかわる保護者により、非偶発的に児童に加えられた行為」で、その行為によって子どもが心身安全に健やかに育つ権利が侵害されているかを基に見極め、対応していくのである。

虐待の分類は、厚生省報告例記入要領及び審査要領によると、①身体的虐待②ネグレクト(養育の拒否及び放棄)③性的虐待④心理的虐待の4つに、⑤登校禁止が含まれて5分類になる。しかし、池田・他(1990)が述べているように登校禁止(家への閉じ込め)は本来ネグレクトであり、4つに分類されるのが一般的である。この従来の子ども虐待の4分類以外に提案されている分類として、斎藤(1994)と池田・他(1990)の分類がある。

斎藤は、強迫的・衝動的におこなわれるものと、それ以外のものに分けることを提案している。無知や貧困から起こる「古典的」虐待と、近代の脆弱な核家族の病理から、愛さなければと思いながらも虐待を繰り返している「家族病的」虐待とに分けるべきだとしている。子どもとの関係を大事にしようと思いながら、わいてくる憤怒を統制できなかったり、自分を責めて子どもを愛そうと努力しながらも虐待してしまう母親は、この強迫的かつ衝動的な嗜癖としての子ども虐待であると言える。

池田は、貧困や社会慣習により、子どもの人権が認められずに行われるものを「社会病理」としての子ども虐待と称した。これに対して社会が子どもの人権を認めるようになってからも、親個人の精神病理の結果行われる、あるいは家族全体の病理として現れるものを「精神病理あるいは家族病理」としての子ども虐待と称した。池田の述べている社会病理としての虐待は、斎藤のいう古典的虐待であり、精神病理・家族病理としての虐待は強迫的・衝動的な嗜癖としての子ども虐待であると考えられる。更に、池田は日本社会において、時代と共に虐待のあり方が移行していると述べている。児童憲章で親と国が子どもの健全育成の義務を負うことがうたわれたにも関わらず、今度は親個人の精神病理、あるいは家族全体の病理としての子ども虐待が前景に出てきた。いわば、発展途上国型から文明国型の子ども虐待に移行したのだと指摘している。

### 2. 家族関係から見る子どもの虐待

#### (1) 虐待傾向のある親の特徴

これまで、子どもを虐待する親に共通した特性、いわば「虐待性人格」が存在するか否かが、多くの臨床家の関心を集め研究や調査が行われてきたが、現在のところ、そのような特定的人格は存在しないといわれている。しかしその一方で、子ども虐待が生じた親の育児に関する特徴として、①望まない妊娠と分娩時の問題、及び子どもの疾患、②自分の子どもの発達を平均以下と見る傾向、③子どもへの非現実的な期待と体罰多用の躰、④夫からのサポートの欠如や社会的孤立傾向、などが挙げられている(西澤, 1994)。

\*鳴門教育大学教育臨床講座

\*\*城西病院

また、子どもを虐待する母親の中には、理想的な母親になれない自分自身を過剰に責める結果、虐待にいたっている場合も多い。そのような母親の特徴としては、几帳面で何事も完璧にやろうとする“完全癖”“良妻賢母のイメージ”の持ち主で、子どもをきちんと育てなければという想いが強すぎるために、自分の思い通りの育児ができずに悩んでいる場合が多い（金井，1995）。責任感が強く子育ての悩みを自分の弱みと考えがちなために、気軽に周りに話せずに孤軍奮闘して子育てしているのである。しかし、こうした子育ては虐待する母親特有のものではなく、最近の一般的な母親にもみられる子育てスタイルである（多賀谷，1996）。

### (2) 虐待が生じやすい家族の特徴

子ども虐待はどのような家族にでも起こりうる。親の学歴や職業、社会的地位の高さ、生活水準の高さ等は、虐待を否定する根拠にはならない。経済的に豊かな家族にも貧困な家族にも生じうるのである。しかし、子ども虐待が生じやすい家族の特徴について、夫婦不和、社会的孤立、経済的不安などを指摘する研究も多い（Hunter, R.S., et al., 1978. 大久保，1990. 小林・他，1992. 藤井，1996）。夫婦不和・離婚・別居・不安定な婚姻関係など、夫婦間に様々な問題や葛藤が存在する場合、その関係で生じた不満や怒りなどの感情が子どもに転移的に向けられると考えられる。家族が私的にも公的にも社会的に孤立している場合、それは単に都市化などの社会的問題だけでなく、混乱した原家族の関係を背景とした基本的信頼関係形成の問題としても理解できる。様々なストレス要因が重複して、多くの問題を抱えた家族となった時、親は子どものいたずらのような些細なストレスでさえも引き金となって、不満や攻撃が最も身近で最も幼弱な子どもへと向けられるのである。

### (3) 虐待を誘発しやすい子どもの特徴

親の特徴や家族の特徴と同時に、虐待を誘発する子どもにも共通の特徴を見る研究がある（Elmer, E., & Gregg, G.S., 1967. 池田，1989. 三原・他，1991. 小林，1996. 棚瀬，1996）。それらの特徴は、前述した、望まない妊娠、異常妊娠や異常な陣痛などの妊娠中や分娩時の問題の他、未熟児、多胎、虚弱、長期間保育器に入っていたなどの早期の母子分離経験、非嫡出児、期待はずれの性の子ども、を挙げている。

## 3. 目的

本研究では虐待行動を広義にとらえることによって、一般の母親に対する質問紙調査を行い、母親の子どもへの「虐待傾向」の現状を探りたい。それと同時に、夫をはじめとしたサポートの有無、及び母親の母親役割に対する意識の如何を調査し考察することにより、虐待傾向の背景や要因を探り、ひいては子ども虐待の課題と改善策を検討してゆきたい。

## II 方法

地方都市である A 市の 1 歳 6 ヶ月健診に来所した母親を対象に、筆者の作成した質問紙調査を実施した。この質問紙は、虐待傾向・サポート・母親役割肯定意識・母親役割否定意識の 4 尺度からなっており、計 32 項目である。回答は「その通り」「どちらかと言えばそうだ」「どちらでもない」「どちらかと言えばちがう」「ちがう」の 5 件法で尋ね、それぞれ 5, 4, 3, 2, 1, と点数化した。また、無記名だが、母親の年齢と父親の年齢、家族構成や子どものきょうだい構成などについてもフェイスシートで尋ねた。

1997年 4 月～8 月に各家庭に郵送し、健診当日に回収した。有効回答者は 152 名であった（回収率は 79.7%）。

## III 結果と考察

### 1. 対象者の実態

母親の年齢は 20 歳代後半から 30 歳代前半が多く、全体の 74.3% を占めていた。その一方で父親の年齢は、30 歳代前半が最も多く、20 歳代後半から 30 歳代後半で 81.6% を占めていた。

家族構成については、63.8% が核家族であった。幼児の祖父母のいずれか一人でも同居している場合を大家族としてまとめると、35.5% であった。また、きょうだい構成は 1 人と 2 人がほぼ同数で、両方で 84.9% だった。

調査対象となった 1 歳 6 カ月の幼児の性別は、男 75 名、女 76 名、無回答 1 名、とほとんど同数であった。

母親の職業については、専業主婦が 55.9% だった。一方「フルタイム」「パートタイム」「内職」「自営業」などの職に就いている母親を合計すると 44.1% だった。

父親の帰宅状況及び帰宅時間を尋ねたところ、毎日帰宅している父親が90.1%を占めており、それ以外の「数日に1回」「月に1回」「単身赴任」は7.2%であった。毎日帰宅する者のうち、帰宅時間は、19時から21時の間に帰宅する父親が最も多く、51.1%と約半数にのぼる。次いで、19時以前に帰宅する父親が31.1%、21時以降の帰宅は16.3%、無回答1.5%だった。

更に、妊娠分娩時における問題の有無を問うたところ、特に問題を感じなかった母親は70.4%、何らかの問題を感じていた母親は28.9%、無回答0.6%だった。また、出産後に未熟児室への入院など特別なケアを受けた新生児は全体の11.2%であった。子どもの出生体重は、2500gから3500gの間が71.7%を占めており、3500g以上が24.3%、未熟児とされる2500g未満は3.9%だった。更に、出産後の退院状況については、93.4%が母子同時に退院している。母子別々の退院で、残って入院した子どもは4.6%、残って入院した母親は0.7%であった。

## 2. 質問紙の信頼性と妥当性

### (1) 項目分析

本調査のために作成した虐待傾向尺度・サポート尺度・母親役割肯定意識尺度・母親役割否定意識尺度について総得点を求め、総得点の上位25%の者を高得点群、下位25%の者を低得点群とし、各項目ごとに項目分析(G-P分析)を行った。「」は質問項目、( )は質問項目番号を意味する。

虐待傾向尺度の項目分析の結果、8項目のうち、唯一「(26)罰としてミルクや食事を与えないことがある(与えないことがあった)」に有意差が見られなかった。これは虐待として非常に重みのある項目であり、「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と回答した母親がいなかったために、高得点群が存在しないことが大きな要因であろう。しかし、虐待傾向をみるために重要な項目であるため本尺度に妥当と考えて採用した。サポート尺度・母親役割肯定意識尺度・母親役割否定意識尺度に関しても同様の分析を行ったところ、各尺度の全項目に有意差が見られたため、それぞれ尺度として考える。

### (2) 因子分析

作成した32項目について因子分析を行ったところ、3項目以外は、各尺度絶対値.30以上の因子負荷量を有していた。この3項目は虐待傾向尺度の「(26)罰としてミルクや食事を与えないことがある」が-.108、「(33)罰として一室に長時間閉じこめることがある」が.278、母親役割肯定意識尺度の「(8)私にとって子どもが何より大切だ」が.271であった。前者2つは項目分析で述べたとおり、また項目8については鈴木(1985)の養育態度調査研究において高因子負荷量であったことから、これらを含めて検討し考察するために、各尺度の項目として採用することとした。

### (3) 信頼性

クロンバッハの $\alpha$ 係数によって信頼性係数を算出したところ、虐待傾向尺度は.70、サポート尺度は.70、肯定意識尺度は.60、否定意識尺度は.69、とそれぞれの値を得た。全尺度.60以上ということで、尺度として信頼性があると考えた。

## 3. 全体的傾向

### (1) 虐待傾向尺度；図1(次ページ)

項目2, 9, 15, 18は身体的虐待の色濃い行動であり、項目7, 26, 28, 33はネグレクト的行動である。

回答状況から、8つの項目を3段階に分けることができる。まず、「(2)必要以上に、つい子どもにきつく言ったり叩いたりしてしまう」と、「(9)子どもが泣くと、わたしの方が泣きたくなったりヒステリックになったりして、子どもにあたってしまう」である。これらの項目には、それぞれ55.9%、46.7%と約半数の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えており、平均値も3点台である。次に、「(7)子どもが泣いて呼んでも、気分によって無視してしまう」と、「(15)なかなか寝ないことや夜泣きに我慢できず、布団に押し付けたりして寝かせようとする」である。これらの項目には、それぞれ30.3%、22.4%と2~3割の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えており、平均値は2点台である。最後に、「(18)子どもを叩きつけて、ハッと我にかえる」「(28)子どもだけ置いて一晩家をあけることがある」「(33)罰として一室に長時間閉じ込めることがある」「(26)罰としてミルクや食事を与えないことがある」である。これらの項目には、それぞれ84.2%、96.1%、96.1%、97.4%とほとんどの母親が「ちがう」「どちらかと言えばちがう」と答えているものの、数名の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と回答しており、平均値は1点台である。

項目2, 9は多くの母親が一般的にとりやすい虐待傾向的行動であるとすれば、項目18, 26, 28, 33は一部の母親がとる虐待傾向的行動と、分けてとらえることができるだろう。即ち、前者は子どもと関わる中で“つい”あるいは

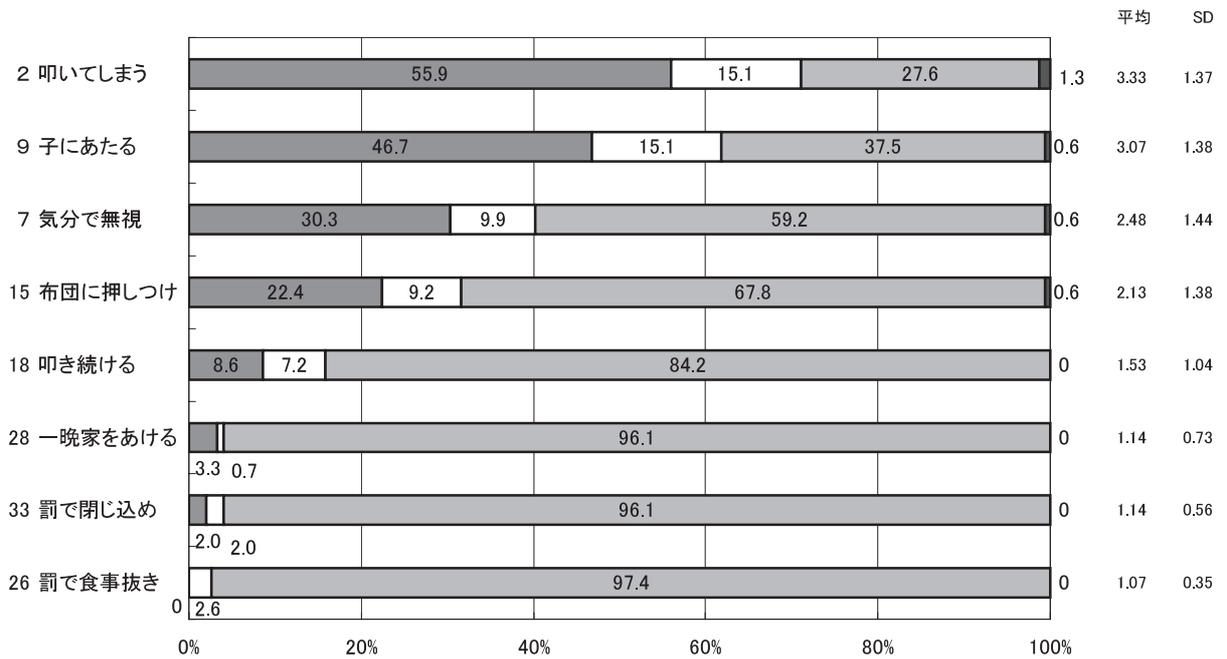


図1 虐待傾向尺度各項目の度数分布 (%、152人、1 ≤ 平均値 ≤ 5)

■ その通り・どちらかと言えばそうだ □ どちらでもない □ ちがう・どちらかと言えばちがう ■ 無回答

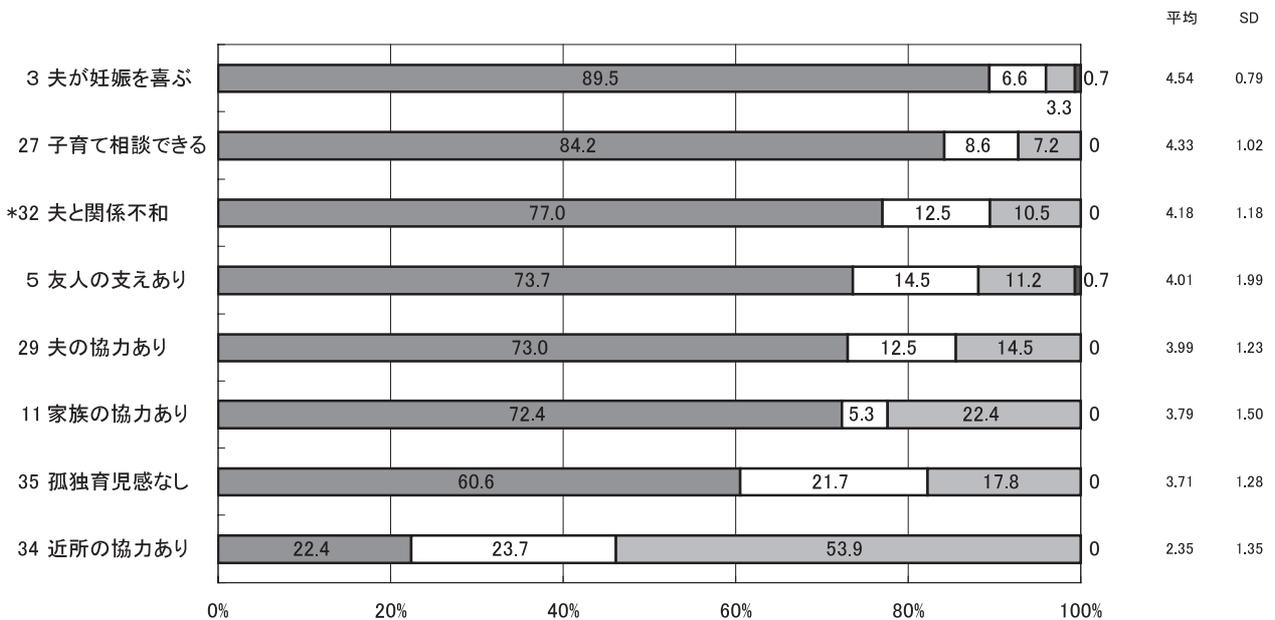
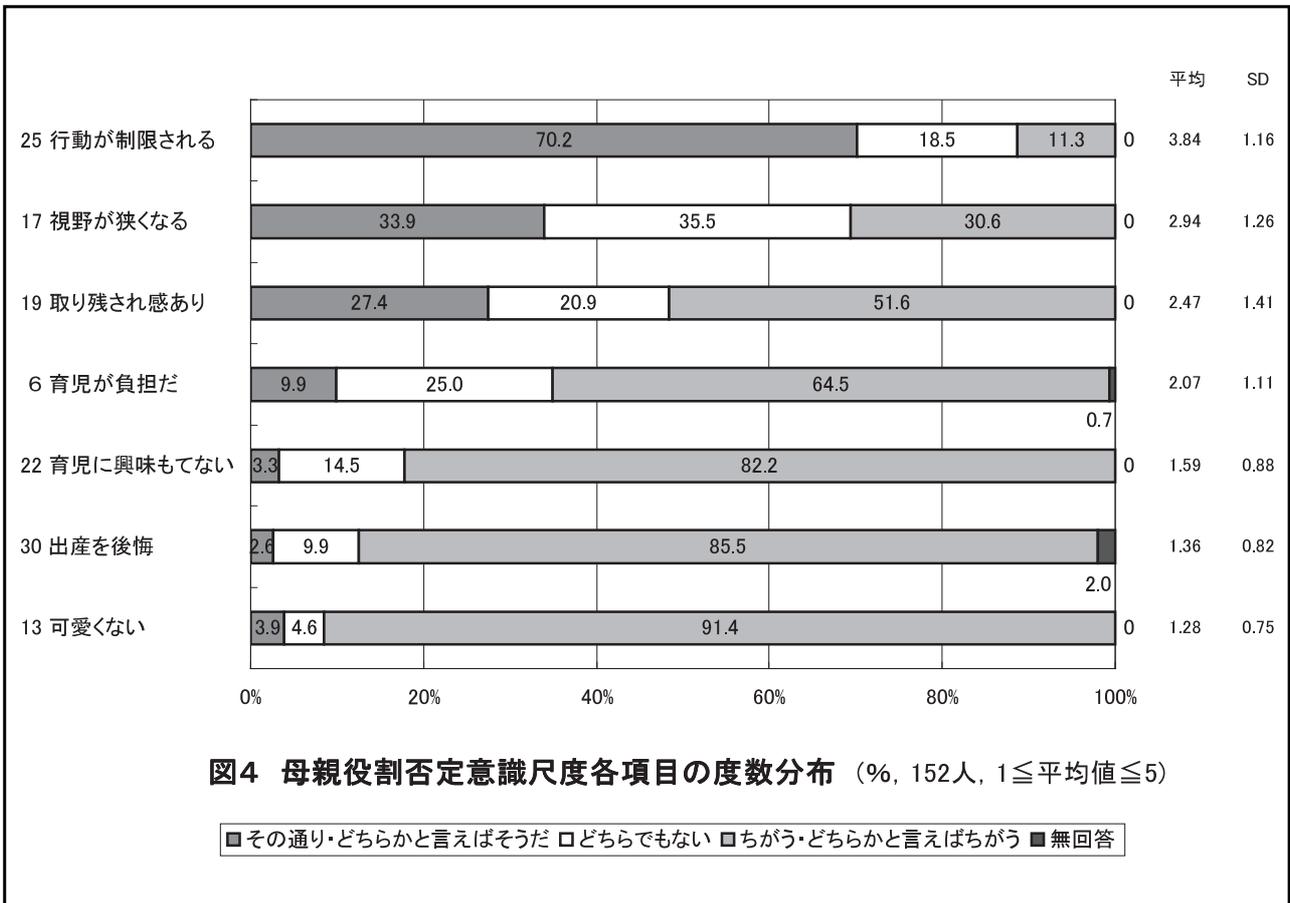
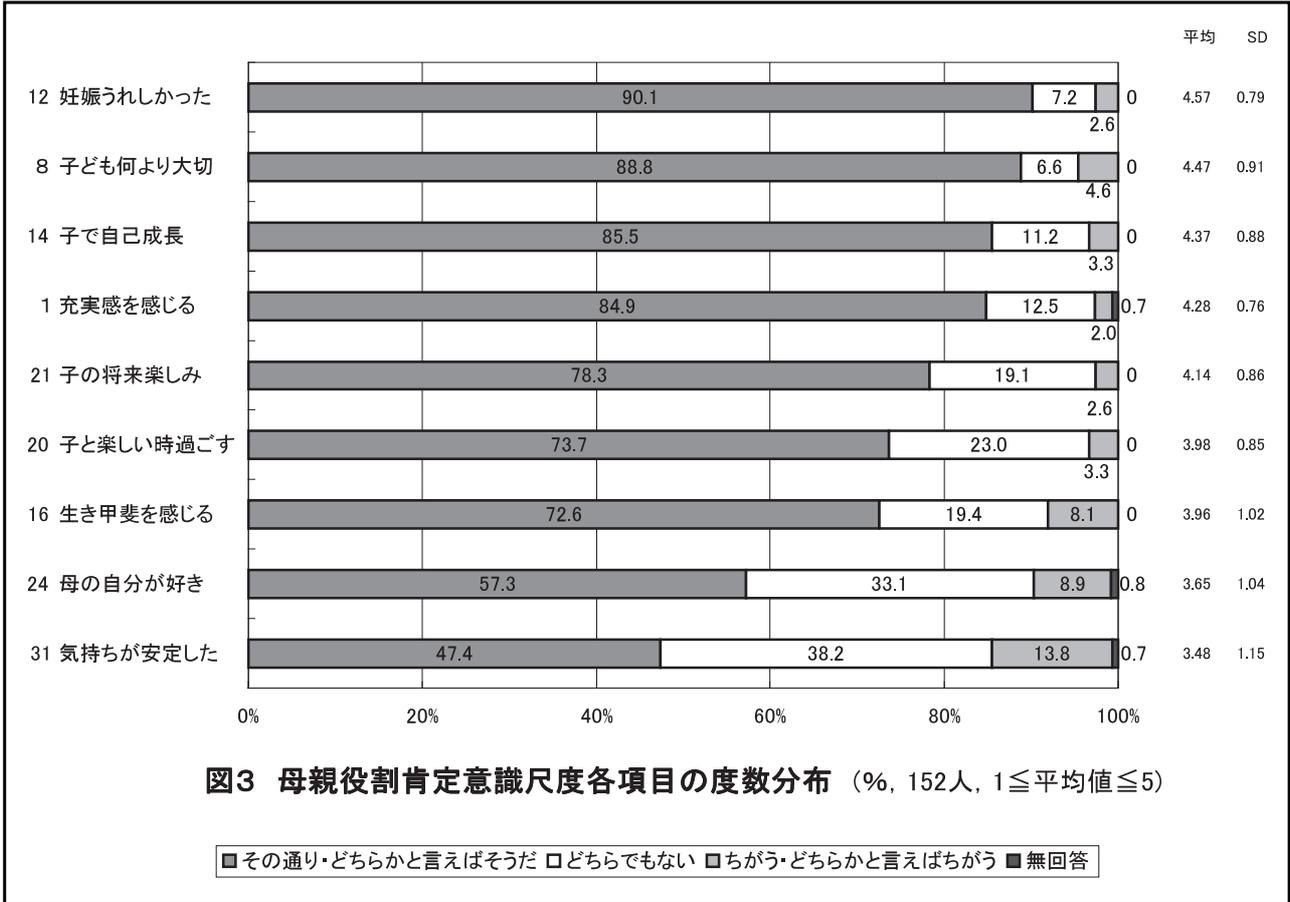


図2 サポート尺度各項目の度数分布 (%、152人、1 ≤ 平均値 ≤ 5)

■ その通り・どちらかと言えばそうだ □ どちらでもない □ ちがう・どちらかと言えばちがう ■ 無回答

\*32「夫との関係がうまくいっていない」は逆転項目



“我慢できずに”とってしまう行動であるのに対し、後者は子どもをより攻撃的に、あるいは放置するなどの行動であり、より問題である可能性が高いと言える。後者の項目18, 26, 28, 33のいずれかに「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と回答した母親は、152名中12名いる。この12名は虐待傾向が疑われると考え、個別分析対象者としてフェイスシートなどに注目し、後述のように考察を加えた。

## (2) サポート尺度；図2

「(3)妊娠したとき、夫は喜んでくれた」に67.1%の母親が「その通り」と答えている。母親としての出発点は夫婦関係にあり、夫婦関係が情緒的に不安定な場合、育児中の母親の意識は否定的になりやすい。子どもが生まれることに対する夫の喜びや期待、その夫の期待に応えようとする心の働きは女性が妊娠を肯定的に受容する重要な要因である(大日向, 1988)。項目3に加えて、「(32)夫との関係がうまくいっていない」(逆転項目)に77.0%の母親が「ちがう」「どちらかと言えばちがう」と回答したこと、「(29)夫の協力がある」に73.0%の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と回答したことから、母親の心理的安定に必要な夫との充足した関係に関して、比較的保たれているとらえている母親が多いと思われる。

また、「(5)友人はわたしの支えになってくれる」「(11)夫以外の家族の協力がある」に、それぞれ73.7%、72.4%と7割以上の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えていた。更に、「(27)子育ての悩みを心から相談ができる人がある」に、84.2%の母親が同様に回答していた。これらのサポートに関しては、大半の母親はある程度満足している様子がうかがえる。

その一方、53.9%と半数以上の母親が「ちがう」「どちらかと言えばちがう」と答えたのが「(34)近所の人がよく力になってくれる」であり、本尺度の中でそのサポートの低さは際立っている。池田・他(1990)が「昔は地域の拡大家族があったため、父親や母親が不安定でも、親戚や地域全体が家族全体と相互扶助機能があり、子どもの庇護機能も補われていた。ところが、今は核家族時代であり、特に地方から来ると近隣地域は一層バラバラのため家族の危機にSOSを発することができる相談相手が非常に少なくなってしまった」と述べているように、近所の協力機能は低下しているのが現状のようだ。近所のサポートの低さ、極端に言えば近所の中で家族が孤立していることや、一人で育児をしている不安を感じることが、虐待につながる要因の一つと考えられるだろう。

## (3) 母親役割肯定意識尺度；図3

「(12)妊娠したとき嬉しかった」は90.1%の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えていた。また、本尺度のほとんどの項目において、7割以上が母親役割を肯定的にとらえていることが分かった。しかし大日向(1988)が、幼児から高校生の子どもをもつ母親497名を対象にした調査において、4段階評価で平均値3.2と高い値を示した「(31)母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた」が、本研究では肯定意識の中で最も低かった。本項目については、「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えた母親は47.4%で、5段階評価で平均値は3.5であった。また「(24)母親である自分が好きだ」は57.3%の母親が同様に答えており、相対的に他と比べて低い値である。つまり、母親という役割や子どもの存在を概ね肯定的にとらえているが、母親になって気持ちが安定するという訳では必ずしもなさそうである。

## (4) 母親役割否定意識尺度；図4

回答状況から、7つの項目を3段階に分けることができる。まず、「(25)母親であるために行動がかなり制限されている」は、70.2%の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えており、平均値は3点台だった。次に、「(17)自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」「(19)育児の間に世の中に取り残されるように思う」「(6)子どもを育てることが負担に感じられる」には、それぞれ33.9%、28.2%、9.9%の母親が同様に答えており、平均値は2点台と、必ずしも特異な意識ではないようである。最後に、「(22)育児以外のことにしか興味がもてない」「(30)子どもを生まない方が良かった」「(13)本当は子どもをかわいく思えない」である。これらの項目には、それぞれ82.2%、85.5%、91.4%と8割以上の母親が「ちがう」「どちらかと言えばちがう」と答えているものの、数名の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えており、平均値は1点台であった。

## 4. 虐待傾向とその他との相関

### (1) 虐待傾向と他尺度との相関：表1 (次ページ)

各尺度の関連をみるために、それぞれの相関関係を調べた。母親の虐待傾向尺度は、サポート尺度と役割肯定尺度において有意な負の相関が、役割否定尺度においては有意な正の相関がみられた。また、サポート尺度と役割肯定尺度は正の相関が、サポート尺度と役割否定尺度、役割肯定尺度と役割否定尺度はそれぞれ有意な負の相関があった。

表1 各尺度における因子間相関

	虐待傾向	サポート	役割肯定	役割否定
虐待傾向	—			
サポート	-.4187***	—		
役割肯定	-.4651***	.6265***	—	
役割否定	.4747***	-.5180***	-.5609***	—

\*\*\*p&lt;.001

## (2) 虐待傾向と各項目の分析

各尺度と、フェイスシートを含めた各項目の関連をみるために、t検定および2要因分散分析を用いた交互作用から分析を行ったところ、以下のようなことが分かった。

### ① 父親の帰宅時間を中心にみる虐待傾向

サポート尺度と正の相関がみられたのは、「父親の帰宅時間」であった ( $r=.347, p<.001$ )。また、「父親の帰宅時間」は「母親の役割肯定意識」とも正の相関関係にあった ( $r=.231, p<.01$ )。木田 (1980) が「父親の帰宅時間が育児参加の規定因である」と述べているように、父親の帰宅時間は、父親が子どもと関わる時間を左右する大きな媒介要因である。父親の帰宅時間が早いことにより「父親が子どもと一緒に夕食をとったり、会話をするなど、接触がより多くなることで、家族間の団欒が充分だという母親の満足感」(柏木, 1993) や安心感に結びつくためと思われる。つまり、一般の母親の全体的傾向として、父親の早い帰宅は、母親が母親役割を肯定的にとらえる大きな要因であり、それらは母親の被サポート感や虐待傾向の低さにもつながると考えられる。以上から、半数以上の母親に見られた「(2)必要以上に、つい子どもにきつく言ったり叩いてしまう」「(9)子どもが泣くと、わたしの方が泣きたくなったりヒステリックになったりして、子どもにあたってしまう」という行動は、父親の早い帰宅から得る母親の安心感によって、軽減される可能性が高いのではないだろうか。

母親が子どもに攻撃性を向けることなく、安定した愛情をもって接するためには、母親自身が自己を肯定し、安心していることが必要である。そしてそのためには、父親との安定した関係は不可欠であり、父親の早い帰宅もその一因となることが分かった。

しかし、前述した個別分析対象者12名の父親平均帰宅時間は「19時40分」と特に遅いとは言えない。それにも関わらず、半数が夫の協力不足を強く訴えており、その虐待傾向は高い。特に、そのうちの1名の母親は父親の帰宅時間が「17時」と非常に早い、夫のサポート不足、孤独感や不安感を最も強く訴えている。父親の帰宅時間が早くても、サポート欠乏感や強い孤独感を訴えている場合、より深刻な不安を抱えていることは容易に想像できる。また、個別分析対象の母親のうち9名が「(13)子どもを生まない方が良かった」「(30)子どもを可愛く思えない」を否定しており、子どもの存在自体は肯定している。このことから、父親が早く帰ってきて、母親が「協力してくれない」と感じることによって、本来は肯定的にとらえている子どもに対して、より虐待傾向が強い養育態度をとってしまうと考えられる。

以上から、全体的傾向としては「父親の帰宅時間の早さ」は母親のサポート要因となり、虐待傾向の低減に寄与するが、より深刻な問題となるような虐待的行動をとる母親達に関しては、父親の帰宅時間の早さはサポートの指標になりにくいことが分かった。

### ② 母親の職業を中心にみる虐待傾向

各尺度と母親の職業を分析したところ、有職主婦が専業主婦よりも虐待傾向が高いことが分かった ( $t=2.12, p<.05$ )。更に、虐待行動の項目を合わせてみたところ、有職主婦は虐待的行動の中でも「(7)子どもが泣いて呼んでも気分によっては無視してしまう」「(15)なかなか寝ないことや夜泣きに我慢できず、布団に押し付けて寝かせようとする」という行動を起こしやすいことが分かった ( $\chi^2=3.83, p<.05; \chi^2=4.98, p<.05$ )。

また、役割否定意識が高い有職主婦は、項目7, 15の虐待傾向に加え、「(2)必要以上に、つい子どもにきつく言ったり叩いてしまう」「(9)子どもが泣くと、わたしの方が泣きたくなったりヒステリックになったりして、子どもにあたってしまう」という行動が多くみられた ( $F=4.02, p<.05; F=13.12, p<.001$ )。専業主婦の場合は役割否定意識の高い群と低い群で虐待傾向に差がみられなかったことから、有職主婦における役割否定意識の高さが、その虐待傾向の高さと深い関係があると言える。

更に、有職主婦は専業主婦よりもサポートを低く感じている傾向がみられた ( $t=1.65, p<.10$ )。特に、サポートを低く感じている有職主婦、父親の帰宅時間が遅い有職主婦は虐待傾向が高いという結果が得られた ( $F=4.17, p<.05$ ;  $F=4.52, p<.05$ )。そして、サポートを低く感じている有職主婦は「(15)なかなか寝ないことや夜泣きに我慢できず、布団に押し付けて寝かせようとする」、 「(18)子どもを叩きつけて、ハッと我にかえる」という行動が多くみられた ( $F=3.92, p<.05$ ;  $F=10.24, p<.01$ )。それぞれ22.3%、8.5%の母親が「その通り」「どちらかと言えばそうだ」と答えた項目であり、多くの母親にみられる虐待的行動(項目2, 9)と異なり、比較的問題と考えられそうな虐待的行動である。

以上のことから、有職主婦の家庭と仕事の両立という重労働に、母親の役割否定意識の高さや、サポートの低さといったストレスが加わることにより、より多くの虐待的行動を引き起こしていると考えられる。

大日向(1988)はく子育てへの否定的意識や欲求不満は専業主婦の方が高く、専業主婦の様々な要因による閉塞状況は子どもへの虐待傾向を高める要因の1つであるとしてしている。しかし、本研究においてはそのような結果が得られなかった。その要因として、まず、有職主婦の多忙や心身疲労が想像できるだろう。柏木(1993)によるとく共働きの家事労働時間は妻が約4時間であるのに対して、夫はわずか7分に過ぎず、この数値は共働き家庭が増え続けた5年間ほとんど変わっていない。家事育児の男女協同意識が強まっているとはいえ、日本においては“家事育児は妻が行う”という意識が根強く、有職主婦は家事育児を両立する余裕がないのだと思われる。また、本研究の個別分析対象の12名中10名が有職主婦であったことも、有職主婦における様々な負荷要因を物語っているように思われる。個別分析対象者のなかには、「有職主婦」「サポートの欠乏感」「高い役割否定意識」「父親の遅い帰宅」など数多くの要因が重なって、より多くの虐待的行動を引き起こしている例があった。このような母親の存在は、負荷要因が重なるほど、虐待的行動が増える危険性を示唆していると言えるだろう。

### ③ 妊娠分娩時の問題からみる虐待傾向

妊娠分娩時の問題の有無と虐待傾向を分析した結果、妊娠分娩時に問題があった群より、問題がなかった群に、有意に近い差で虐待傾向がみられた ( $t=1.66, p<.10$ )。また、「(2)必要以上に子どもにきつく言ったり叩いたりしてしまう」「(15)なかなか寝ないことや夜泣きに我慢できず、布団に押しついたりして寝かせようとする」において、問題があった群はサポートの高低による虐待傾向の差が見られなかったが、問題がなかった群ではサポートを低いと感じている母親に、有意な、または有意に近い虐待傾向が見られた ( $F=2.94, p<.10$ ;  $F=4.85, p<.05$ )。

従来の研究によると、妊娠分娩時の問題は虐待の危険要因とされている(田村, 1985)。ところが、本研究においてそのような結果は得られなかった。この背景としては、これまで考察してきた父親の存在の大きさから、く妊娠時に父親の存在が占める位置は大きく、親密さや優しさを含めたサポートを求める対象となっている」という大日向(1988)や、く父親が妊娠や出産をどのように受け入れていたかが、出産後の母親の育児に大きく関わってくる」という松田(1993)の指摘が当てはまるだろう。母親が父親との心理的安定に基づいて、妊娠を自分や夫婦の問題としてどのように関わるか、母親としての自己をどの程度肯定的にとらえることができるかが重要と思われる。更に、個別分析対象者をもても、妊娠分娩時に何らかの問題があったのは3名のみであり、問題となる虐待行動を特に多く呈している母親達には妊娠分娩時の問題はみられなかった。

以上から、妊娠分娩時の問題はあくまでも一時期の経験であり、問題があったことが虐待傾向の直接要因になるは言えないだろう。妊娠分娩時に問題があっても、夫婦が前向きに受けとめることができれば、出産後の母子間の感情関係も好ましいものとなり、虐待的行動につながりにくいと推察される。

## IV おわりに

現在も、“虐待”という文字をメディアで見ない日はないほど、子ども虐待は深刻な問題である。しかし、本研究では、多くの母親が子どもを可愛いと感じ、葛藤し奮闘しながらも、母親としての役割に向き合っている姿を目の当たりにした。そして、研究に協力して下さった母親たちによって、父親の存在の大きさと夫婦関係の大切さが、改めて提言されたように感じられる。

質問紙調査をとってから既に10年近くが経とうとしている。本研究を一般化することはできないが、母親の虐待傾向や役割意識、父親の育児参加に変化はみられるだろうか。追跡研究による比較を試みたい。

注) 本論文は、高芝(1997)の修士論文を、山下が指導し、高芝がまとめ直したものである。

## 文 献

- Elmer, E., & Gregg, G.S. 1967 Developmental characteristics of abused children, *Pediatrics*, 40, 596-602.
- 藤井東治 1996 「『望まない妊娠の結果生まれた児』への虐待をめぐる問題」*家族心理学研究*, 10(2), 95-117.
- Hunter, R.S., Kilstrom, N., Kraybill, E.N., & Loda, F. 1978 Antecedents of child abuse and neglect in premature infants: A prospective study in a newborn intensive care unit, *Pediatrics*, 61, 629.
- 池田由子 1989 「児童虐待の家族病理」*教育と医学*, 37(11), 27-32.
- 池田由子・他 1990 「特集・児童虐待」*日本医師会雑誌*, 103(9), 1433-1483, 1489-1516.
- 金井雅子 1995 「教育的な罰から児童虐待へ」*児童心理*, 49(4), 136-141.
- 柏木恵子 (編) 1993 『父親の発達心理学 — 父性の現在とその周辺』川島書店
- 木田淳子 1980 「共働き家庭における父親の育児行動」*滋賀大学教育学部紀要*, 30, 116-135.
- 小林美智子 1996 「被虐待児症候群」*小児保健研究*, 55(2), 163.
- 小林美智子・他 1992 「大阪府の6歳以下で発見された虐待の実態 — 児や家族および援助機関の実態」*児童青年精神医学とその近接領域*, 33(5), 29-36.
- 松田惺 1993 「父—子関係」「父親の子どもの発達への影響」柏木恵子 (編) 『父親の発達心理学 — 父性の現在とその周辺』川島書店 pp.227-307.
- 三原聖子・山下裕史朗・山下文雄 1991 「被虐待児症候群」*小児内科*, 23, 123-127.
- 西澤哲 1994 『子どもの虐待 — 子どもと家族への治療的アプローチ』誠信書房
- 大日向雅美 1988 『母性の研究』川島書店
- 大久保修 1990 「小児科医の日常診療にみる虐待」*日本医師会雑誌*, 103(9), 1478.
- 斎藤学 1994 『児童虐待 [危機介入編]』金剛出版
- 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 1985 「子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成」*愛知教育大学研究報告*, 34, 139-152.
- 多賀谷篤子 1996 「児童虐待する母親の心理」*児童心理*, 50(6), 160-168.
- 田村健二 1985 「家庭内児童虐待の実態」*教育と医学*, 33(9), 20-26.
- 棚瀬一代 1996 「実母による乳幼児虐待の発生機序について — 事例分析による検討」*心理臨床学研究*, 13(4), 427-435.

# **The current tendency of Japanese child abuse from their mothers**

— the questionnaire on the regular health screening test at one and half years old babies —

Kazuo YAMASHITA\* and Tomoko TAKASHIBA\*\*

(Keywords : child abuse, child care support, recognition of mother's role)

The purpose of this research is to acquire the current tendency of Japanese child abuse from their mothers. The researcher analyzed its tendency from a viewpoint of their recognition of mother's role, affirmative or negative. The subjects were 152 Japanese mothers stayed in western Japan and the data were gathered from the questionnaire on the regular health screening test at one and half years old babies. The findings show as follows ; first, there is a strong correlation between the time of their husbands' coming back home and the tendency of mother's child abuse. Second, there is, also, the correlation between the rates of mother's having jobs and their negative recognition of their role. These findings would contribute to search the new insights of backgrounds and factors of Japanese child abuse from their mothers and improve its current situation.

---

\*Clinical Studies and Practice of Education, Naruto University of Education

\*\*Jhosei Hospital, Tokushima